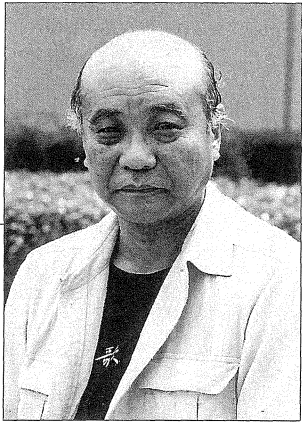


# 随想



おだしま・ゆうし/1930年旧満州生まれ。  
東大名誉教授、文京女子短大教授、東京芸術劇場館長。「シェイクスピア全集」(芸術選奨文部大臣賞受賞)はじめ英米演劇109本を翻訳。「シェイクスピアより愛をこめて」など著書多数。産経新聞にコラム「芝居散歩」を連載中(7年目)。

落ちこぼれていく。上位を確保して生きのびるためには、劇場としてメリットになる特色をもたねばならない。特色をもつためには、貸し小屋としてただ申し込みを待っているだけではダメであり、自主企画・自主製作を年間にせめて二回、そして貸す場合もなんらかの方向を定めて優先基準を明確にうち出すことが必要だろう。グロープ座(東京都・新大久保)がシェイクスピア劇を自主製作し、貸すときもシェイクスピア上演を優先しているように。

たとえば——見る側に立って考えてしまうのだが

——わが中ホールでストレート・プレーを、それも世話

がかつた芝居を見ていると、妙に落ちつきが悪くなる。

豪華な客席にゆったりすわっている自分と舞台との距離が、さむぎむと遠いのである。そのあいだに流れるはずのあたたかい親密感が伝わりにくいのである。

## 館長のひとりごと

小田島雄志

・芝居が好きで、芝居を見ることで人生を楽しんできたので、芝居の世界へのせめてもの恩返し、と思つて東京芸術劇場館長を拝命してから、まもなく二年になる。それでも、いまだに芝居を「創っていたら、見ていただく」立場にあることを忘れて、もつぱら「見る」側に身を寄せている自分に気がつき、反省するところが多い。たとえば——

いや、その前に、池袋駅西口の目の前にそり立つわが劇場をかんたんに紹介しておこう。ホールは全部で四つ、二千人のクラシック・コンサート用の大ホールと、八五〇人の中ホールと、三〇〇人の小ホールが二つ。ほかに、ギャラリー、展示室、会議室など。それらはすべて利用者に貸すだけだったが、ここに至るまで、ホールでの自主企画・自主製作への模索を、人員・予算の手当なしで少しずつはじめたところである。

大ホールはこの際おいておいて、問題は中・小ホールである。いま東京で一か月に上演される芝居の数はざつと二〇〇本。しかもまだまだ劇場の増設が予定されていると聞く。公共ホールも地方によっては稼働率五〇パーセントをきるころが多いというのに、わが劇場は各ホールとも九〇数パーセント、申し込みを受けてもおことわりするのに苦勞する状態であるが、だからといって安閑としているわけにはいかない。劇場がこれ以上増える、いずれは自然淘汰の時期がきて、まずランクづけが進み、下位のほうは芝居の世界から

わが中ホールにはミュージカルがよく似合う。と思う。ステージせましとばかり飛んだり跳ねたり、いや、まちがえました、歌ったり踊ったりするミュージカルは——世話芝居の求心力に対して——遠心力が作用するから、後方の客席にいても舞台が遠くはならない。そしてホールの雰囲気自体も、日常的なりアリズムよりもロマンティックな夢をあふれさせるのにふさわしい。と思う。だから、ここをミュージカル専門ホールとして、そのために舞台機構や音響効果などを再調整し、お客さんがいつまでたっても一流のミュージカルをご覧いただけるようにしたらどうだろう。歌舞伎座に行けばいつでも一流の歌舞伎が見られるように。また、たとえば——ここでも見る側になつてはいるのだが——小劇場の観客層にとつてなにかいぼん不満かというところ、おもしろいという評判を聞いて見たいと思つたときには、座席数も公演日数も少ないため、その芝居の切符が手に入らない、ということである。

欧米では、おもしろいという評判が立てば当然ロングランにもちこみ、創る側も見る側もハッピーである。だがわが国では、いわゆる商業演劇を別にすると、自分たちの劇場をもっているグループが俳優座やテアトル・エコーなどごく少数に限られているので、創る側は少なくとも一年以上前に上演する劇場を予約しなければならぬ。たとえなにを上演するか決まっていな場合でさえも、である。そして二週間借りたとなると、当たろうが当たらないがとにかく二週間きつちり

やることになる。だから日本の演劇人は、当たらないれば三日でボシャリ当たればロングランで半分食つていけるのでいのちがけでとり組む欧米の演劇人とは、意気込みがちがう。スケジューリングを予定どおりこなすだけのサラリーマン化現象さえ見受けられる——いや、話が別の方へそれてしまった。館長として言いたかったことは——

わが劇場には同規模の小ホールが二つあるのだから、一つは従来どおりの「貸し小屋方式」を残しておいて、もう一つは「名画座方式」でやっていけないだろうか。学生時代、映画の名作を名画座で見せてもらったもの思いつきにすぎないが、小ホール向きの芝居で評判の高かつたものを、一、二年のあいだにここで再演してもらおうのである。それもできたら三、四週単位で。続けられるものなら二、三か月のロングランで。お客さんは、ここにくれば安心して小劇場演劇の評判作を見られるのである。そして月に一ステージは、たとえば平日マチネーなどに、高校生を無料招待してはいかが、という案も出てくるだろう。と思う。

東京芸術劇場も今秋で五年たったことになる。都民の皆さんにもだぶ親しまれてきたことは実感している。さらに一段と愛されるためにはどうすればいいか、館長としての夢のようなひとりごとをつおやいてしまつたが、近いうちにこのような「ひとりごと」を「対話」にもちこみたい、と思つているところである。